

彙報

京都哲學會公開講演會

十月廿六日(念)午後一時三十分より凡そ三時間に亙り京大法
經第二教室に於て左記の如く公開講演會を開いた。

一 心理學に於ける 行動主義の發展

京大文學部
(心理學)講師 八木 昂氏

一 神 と 智 慧

京大文學部
(基督教學)教授 有賀鐵太郎氏

週日にもかゝらず多数の來聴を得て盛會であつた。終了後
文學部會議室に於て兩講師を圍んで晚餐を共にしビールをくみ
ながら爽秋の一夕を歡談した。講演内容は論文として本誌上に
紹介の豫定である。

アメリカ研究京都セミナー記事

八月十五日から二十四日迄、京都大學、同志社大學が共同主
催で、哲學、歴史、文學、經濟、政治を擔當するアメリカの大
學教授各一、計五人を招き、講習形式のアメリカ研究會を開い
た。参加者は關西諸大學に籍を置く研究者で、五部門夫、二十
名、之に對し各教授が全部門共通の講義を一乃至二回、各部門
別に四回の講義と討論、圓卓討論一回のほか、参加者以外の各
部門專攻學者を含め、會議方式の共同研究を行うという仕組
み。哲學部門の講師は、スタンフォード大學のゴヒーン博士

(ギリシャ哲學及びアメリカ哲學史を專攻)で、徳島大學淺地
教授、京都大學有賀教授が通譯の勞を取られた。部門講義のテ
ーマは、アメリカ哲學の發展を問題史的に取上げながらアメリ
カ精神の性格を分析し、更に最近のアメリカ哲學の動向を傳統
的ヨーロッパ哲學と對比しつゝ明かにしてゆくことという様
であつて、(一)十七世紀以來のカルヴァン神學に根ざした精神態
度(一種のペシミズム)と經濟的個人主義との結合から、十八
世紀「理性の時代」の政治的個人主義(ジェファースン)を通
り、十九世紀前半に美的個人主義の世界觀(エマソン)が形成
される経緯、(二)この所謂「Transcendentalism」からセント・ル
イスルヘーゲル學派、ロイスに至る觀念論哲學に見られる、汎
神論的傾向と近代科學との調和の試み、(三)その没落と、(四)固有
アメリカ的な哲學としてのジェームスの根本經驗主義と實用主
義の誕生の意味、——科學主義と「繊細な心情」との二方向か
らする宗教への接近、(五)デューイの教育觀の概要、(六)パースの
眞理觀と操作主義の誕生、(七)最近におけるロマン主義的傾向の
哲學(ホワイトヘッド、サンタヤナ)のもつ特徴表、といった
ことが順次に主題とされ、結論は、アメリカ精神の基調は理想
主義であるという様に聞かれた。課外に行われた数回の自由討
論では、論理實證主義や行動主義についても意見交換が行わ
れ、ゴヒーン氏自身は、それらの中、唯名論的傾向を取るもの
に對しては、批判的態度で意見を述べ、よりソクラテイックな
哲學が望ましいといふ度い風であつた。マルクス主義に對して
は自由思想家の寛容な態度を見せ、實存主義や辯護法神學(ニ

パーなども含め)のアメリカでの現狀如何という質問については、極く限られた人々が關心を持つてゐるに過ぎないと云つていたのも注目された、所謂「文化の危機」といつた言葉もそれほどピンとは來ない様子。

共通講義ではアメリカでのキリスト教的人間觀と科學的、進化的人間觀の對決という問題に焦點を置いて前記のテーマを他部門の參加者の爲に概觀、專攻學者會議の第一日は、京大野田助教が西田、田邊兩哲學に關する、及び長尾教授が佛敎の日本精神史に及ぼした影響に關するペーパーを英語で讀まれ、ゴヒーン氏が質問に廻つて東西兩哲學の夫々の性格などについて應酬があつたが、所謂「東洋的無」には餘程難解の面持が見えた。第二日、ゴヒーン氏はヘーゲル流のドイツ哲學は傳統的西歐哲學からの逸脱と斷じ、アメリカ哲學はギリシヤ・ローマ以來の哲學の本道へ復歸しようという抱負を持つと論じた後、アメリカの大學での哲學科教育の内容、方法について詳細に説明、參考になる點が少くなかつた。

ゴヒーン氏のセミナーの進め方についていと、正味一時間二十分位の講義を論點的にセクシヨンに分けていて、三度位話しを逐切り、その都度異論、意見を訊す。質問が沈滞すると、直ぐに自分から短いテーゼを出して討議の基礎にする時もある。討論が纏まらなかつたり、質問が厄介な場合には、參考文獻の名とその章節を可成り正確に擧げて、研究を促すといふ具合。(講師團は、近刊の専門參考書數十點を携帶して來ていて、參加者は次の日迄に指示の箇所を讀み、論點を明にして改めて

質問しうる様にしてあつた。) それと討論に際して、相手の面目に氣兼ねせず肯否定を實にはつきり言うが、ニーモラスな空氣をつくる配慮もしているなど、アメリカの習慣といえばそれ迄であるが學ぶべき點であらう。

尙この研究會は、ロツクフェラー財團の基金でまかなはれたが、アメリカ大學での日本研究が盛なのに呼應して日米大學間の相談で行われたものであり、GHOはプランに關與してゐない由。爲念。(森口)

專攻學者會議第二日ゴヒーン(J. D. Goheen) 教授報告要旨

○現代アメリカ哲學の傾向
ギリシア哲學、特にプラトン、アリストテレスの哲學は今日のヨーロッパ及びアメリカの哲學にとつて重要な役割を演じてゐるが、これら古典哲學に對する關心は三つの型に分けて考へることが出來よう。

1. 古典哲學の内容をたゞそれとして理解しようとして讀むといふ場合

2. 特にキリスト教の立場よりアリストテレスの哲學がキリスト教哲學の基礎となるといふ意味から、それに強い關心を示す場合

3. 現代の哲學者が折にふれてプラトンやアリストテレスに立歸り、そこから哲學的刺戟をえんとする場合

例へばホワイトヘッドが西洋思想史の講義の際にプラトンのテイマイオスを讀ませたが、それは必ずしもテイマイオスの原

意をそのまゝ忠實に理解せんとする目的からではなく、たゞ哲學的思案の刺戟をそれよりえんがためであつた。

かやうな三つの形をとつて古典哲學に對する關心は今日のアメリカ哲學界に廣く行きわたつてゐる。このやうに古典哲學に對する關心が今日まで持續してゐることが今日のアメリカ哲學を理解するための重要な點であるが、このことをアメリカ人自身さえも看過してゐる。例へばサンタヤアナやホワイトヘツドの哲學はその大綱に於て古典哲學に基礎づけられてゐる。もつともホワイトヘツドの場合にはその影響が變形されてはゐるが古典哲學の影響のあることは確かである。またアリストテレスのニコモコス倫理學及びポリテイカは、今日に於てもそれらの關係部門に於て重要な意味をもつてゐる。それにもかゝらずそのことが多くの場合看過されてゐる。けれども實際は例へばデユウエイの Human Nature and Conduct に現はれた倫理思想とアリストテレスの倫理學に現はれてゐる思想とは重要な點で相應してゐる。アメリカではアリストテレスの倫理學が西洋の倫理思想上最大の貢獻をなしたものであることが認められてゐるのである。

さてしばしば信じられてゐるところでは、ブラグマティズムやポジティブイズムは古典的傳統に反對するものであると解されてゐる。ところが大局よりみればアメリカの哲學的反應は決して古典的傳統に對してなされてゐるといふわけではない。むしろアメリカでも古典哲學は最も豊かな哲學の源泉であり資料である、この古典的傳統の豊かさに對比すればアメリカに於ける

カント以後のドイツ觀念論の傳統の貧弱が目につく。従つてドイツ哲學に對する關心は日本に於けるそれよりはるかに薄い。たゞ現在アメリカではドイツ哲學としては主としてカントに關心が集注してゐる。更に今一つはキエルクゴールのエキジスタンテイアリズムへの關心が昂つてゐる。即ちドイツ哲學に對してはこの二點に關心が集注してゐるのである。もつともアメリカでも以前はデユイムズもロイスもドイツ哲學の影響は大いにうけてゐたものではあるが、従つてアメリカに於て今日ほどヘーゲルの影響の衰へてゐる時はない。ロイスはアメリカ最後のヘーゲル主義者であつて彼はアメリカ人の思考方法に合ふやうにヘーゲルを改訂せんと努力をした。しかしその努力は失敗に終つた。だから今日アメリカに於けるヘーゲルの影響は甚だしい。ホワイトヘツドにはヘーゲルの影響もあるが、それは直接ヘーゲルよりの影響といふよりも古典哲學の、特にプラトンの影響をうけてゐるのである。

従つて今日のヨーロッパ哲學に比しアメリカ哲學の方が古典哲學の傳統をより正しく理解してゐるとの考へがアメリカの哲學界にはたしかにある。しかしたからといつてヘーゲルの哲學が全面的に價值がないといふのではない。ヘーゲルでの問題は認識の對象と認識作用との區別が明瞭に設けられてゐないところに彼の根本的な誤りがある。マルキシズムもブラグマティズムも共にヘーゲルに由来してゐるが、そこには等しくヘーゲルの誤りが残つてゐる。私自身はブラグマティズムに反對である。ブラグマティズムに對する私の批判の中心點はそれにはヘ

「ゲル主義の痕跡があるといふ點にある。

二年前に出た Wertheimer: A History of Philosophical Ideas in America の中の "New Realism" の項にアメリカに於けるロイス批判の歴史が跡付けられてゐる。即ち最近二十年間に現れた各種のロイス批判の文獻が整理され系統づけられてゐる。そこには一般にアメリカの哲學がヘーゲルを脱却して古典哲學へ歸らうとするに至つた経緯が明晰なかたちで提示されてゐるのである。

(阿部・肥後)

關西哲學會記事

今春發會した關西哲學會は、十月二十七、八の兩日、千里山關西大學に於て、第一回秋期大會として研究發表會、公開講演會を開き、會後、懇談會を催した。東は金澤から西は廣島迄、參會者百餘名、終始自由闊達な空氣の中に、眞摯活潑な發表、討論が行われた。形式に流れず、學問的に内容が充實していたという點で戦後此の種の哲學會中、最も成果を挙げた場合の一つと考えられる。關西大學側の行届いた配慮に負う所が少くない。學會の次第を次に掲げる。

研究發表(發表時間各四十分、質疑應答二十分。)

△二十七日午前。哲學史關係。 阪大 澤瀉久敬氏司會。

(1) 「メーヌ・ド・ビランの「意識の事實」について。」

阪大 池長 澄氏

メーヌ・ド・ビラン哲學の立脚點を解明するものとしてこの哲學の「事實への關心」をとる。事實とは關係であり、その

が參與している意識の領域であつて、この哲學の方法は經驗と觀察であるが、内的經驗が外的經驗に優先する。諸事實の性質の究極原理は、努力と抵抗との二元性に成り立つ原始事實であり、存在感情を興えるという意味でこれが自我感情と人格性の源泉である。所謂生得觀念も外的經驗も他のもの悉くがこの内的感情から演釋される。が自我は自らその領域と限界とを設定し、人間の生はそれを超えたものと關つて始めて完結する、という點に人間學の原理がある。人間の學は、その二方向への超越——動物的感性と宗教的情念——の源泉を見究める事によつて人間の中間者としての位置を確立する。

(2) 「キェルケゴールの「受取り直し」」 谷大 大谷長氏

通常、「繰返し」、「反復」Wiederholung と譯されるキェルケゴールの概念 Genatselse は本来の意味では「受取り直し」と譯さるべき、宗教的範疇であり、「もとの状態への回復」の意である。これは異教的とキリスト教的、内在性と超越性との關聯を説明する「新なる範疇」である。「媒介」のあるべき場所には本来「受取り直し」がなくてはならぬ。そこでこれは眞の生成の範疇となり、こゝに「これか—あれか」の絶対矛盾的二者擇一を通じての自由の生成(現成)が成り立つ。(受取り直しの辯證法)。主體性の眞理と非眞理、受動と能動の間の逆説的運動を通じて、雷雨の瞬間が望まれるが、本来の生成は自由によつて起り、「受取り直し」は自由の本来の課題である。自由回復の問題は贖罪の問題で、罪あるに拘らず逆説を通じて失われた自由が受取り直されるのである。そこに無限的情熱としての

信仰が對應せねばならぬ。(討論は、眞宗の信仰における事態との類同性について。)

△同日午後。現代哲學。張大 三宅實氏司會。

(3) 『先天的認識と假設—カントとポアンカレについて—』

張大 門 秀一氏

アプリアリな認識についてのカントの説明(一)一切の經驗からの獨立、(二)認識の必然性普遍性、(三)人間認識中に實際に存在する、の三の中、第三を無視せぬ時は、次の五よりなる懷疑が成立する。根本懷疑。「經驗から出て来ないこと」は「經驗と獨立」を、又直接に出て来ないことは間接にも何ら影響を受けぬことを意味しうるか。(一)認識能力の與えた要素の感性的印象からの分離は原理的に可能なりや。(二)、(一)が可能とすると、經驗認識と「純粹でないアプリアリの認識」との區別は可能か。(三)「アプリアリの純粹認識」(形式的命題)は内容と無關係獨立たりうるか。四カントのいう純粹認識は規約 convention として學の必然制約たりえても、自然のそれたりうるか。(四)命題の伴う必然性は客觀的妥當でなく、「主觀的願望」の投影でないか。結論。(四)否定(五)肯定。アプリアリの認識は實際にあり、經驗から直接に出てこぬが、獨立ではなく、「構想力が經驗によつて孕んだ私生兒」である。事象の必然性、普遍性を示しうると「主觀的に」確信される認識は實は「假説」であり、その上に學が作られる。人間は、特定の假説に依準せぬ經驗が出て来れば、之を含む一切の可能的經驗を説明すると主觀的に確信しうる様な(恣意的でない)假設を自由に *hinc* 改めて作り出し

その上に新に學問を建てることが出来る。(討論。(一)「假説」の本質、特に是を全くの「規約」と見るべきや否やについて。(二)カントの「アプリアリ」を權利問題として解きぬ妥當性について。)

(4) 『生命と實在—デイルタイ哲學の問題—』

張大 石田 仁氏

(問題) 實在そのものに迫らんとする哲學の要求が、デイルタイの生命の哲學で如何様に充たされたか。——(解決) 生命は凡てを自己に内在化しそれに生きんとする。實在はこの生命の充實に於てと共にその歴史的發展の姿に於て捉えられねばならぬ。故に思辨的形而上學からは體系的形式を剝奪して實在の深き意味を、又經驗論からは抽象的前提を排除して壞されざる經驗を救いあげべきであり、その時經驗的で同時に無限の深みをもつ實在を全面的に把握するのは人間の歴史を介した自省である。哲學も、生命の自覺形態(世界觀)として批判される時その意味が生かされる故に、生命の哲學は哲學の哲學たらんとする。がそこには生命の多面性と唯一實在の不可認識性が結果する。——實在の論理的規定の缺如が、これを彼岸性においてのみ見ようとしたデイルタイ哲學の必然的結果である。

(5) 『存在に於ける本質の問題性』 大阪市大 樋元和一氏

存在論の系列は、本質存在論 *ontologia essentialis* と現存存在論 *ontologia essentialis* に區別されう。前者の非は、存在 *ens* の本質自體に拘りすぎ、その本質性 *essentialitas* の存在論的位置と意味とへの反省を缺いた點にある。本質存在論の不當なること

は、現存存在論の系列に屬するハイデッゲル風の質存主義的存在論の正當性を直ちに意味しない。質存主義的な現存性への傾斜に於ては、主體的決斷の名の下に汲盡される存在の存在性 *entitas* を *esse* に即して追究する所に、存在の本質性と現存性が眞に存在性に定着する道が開けると考え、之をハイデッゲルの様態論——*Entwurf* に於て *anzusehen* と *anweisen* との

存在論的關係——の再吟味に即して再認識し度い。それは質存主義の原理的正當性を奪うことではなく、其所で充分に展開されなかつた存在の本質性を、カントの自然に對する處理の法としての技術觀を契機として補充することを意味する。(討論。ハイデッゲル『眞理の本質』の立場と發表者の立場との異同について其他)。

二十八日午前。科學論、科學史。大匠精大 阪山徳男氏司會。

(6) 『技術について』 神大 三田博雄氏

(7) 『物理的空間と數學的空間』 金大 中村秀吉氏

從來の空間論は先驗哲學の立場から認識構成の條件として研究されるか、空間表象の分析に力點がおかれる事多く、概念の歴史的發展には十分の注意が向けられなかつたため、大部分の空間論が、數學、物理學、心理學の現實にそぐわぬものとなつてゐる。眞に現實的、具體的な空間論は辯證法的唯物論によつて始めて十分展開され得る。空間は客觀的存在としての物質の存在形式Ⅱ條件として捉えられ、この形式の量的側面を更に任意に抽象して得た形式的構造が數學的空間、又この形式的構造をそれに從つて物理現象が生起すると考えられる如く具體化し

たものが物理的空間である。後者の構造は測定等の實踐を媒介として決定され、測定は物質や測定主體の構造に制約される。空間はかく時間及び物質と辯證法的な關係に立つのであり、それは最近の物理學的發展により裏づけられている。

(8) 『近代科學の形成』

岡大 近藤洋逸氏

近代科學の發端であるコペルニクス天文學は、通常說かれる様にプトレマイオス説の單なる排棄ではない。運動の相對性と元素の重輕論の否定とは前者の重要な論點であるが、一樣圓運動を組合せる同心天球説を棄てたわけではなく、プトレマイオスもアリストテレスの自然學とは偏倚している。コペルニクス説の意義は、(一)天文學が天體運動の豫測と數學的計算の爲に最も簡單で便利な虚構、假説であるとする唯名論的立場 (TAC) の唯名論と新プラトン主義) と、(二)天文學が實在を把握し映す眞なる理論でアリストテレス自然學を完成すべきものとする實在論の立場 (アヴェロエス派——ケプラー、ガリレイも唯名論に反對——) とからの二つの課題を引受けた點にある、

以上で發表を終つて、關大岡野學長の閉會の辭があり、同日午後二時半より同學大講堂に於て公開講演會に移る。

『拒中律について』

京大 山内得立氏

論理學の三原理、同一律、矛盾律、拒中律の中、前二者の反轉が夫、先驗論理、辯證法を生んだのに應じ拒中律の反轉は、「容中律」といふべき新しい哲學の論理を産む。之を無限判斷を手掛りにして追究すれば、無規定者でなく「規定さるべき世界」としての「現實」の論理、可規定性の原理である。さて可規定の

世界を論理的に規定せんとすれば三つの途がある。拒中律は entweder-oder の世界であるが若しこれを逆轉せんとすれば sowohl-als auch か Weder-noch の途をとる外はない。前者の途をとつたものがアリストテレスであり、後者の途をとつたものが印度の龍樹の中観論である。アリストテレスに於ては「中」の *meson* が倫理學だけでなく、「形而上學」の中心思想をなしている。龍樹の中観は空と縁起として大乘佛敎の中心思想をなしている。アリストテレスの中道、龍樹の中観、孔子の中庸はともに等しく中の哲學でありながらそれぞれ異なる特色を有するところに西洋と東洋との思想の異同を見なければならぬ、云々。二時間に亘る大講演の内容をこゝに傳える由もないが、參集者一同に深い學問的示唆と感銘を興えて大成功裡に終了。

引續いて行われた**晚餐會**は會費二百五十圓なれど、阪大矢内原氏の言葉を藉れば關東にては哲學者がかゝる馳走を食しうるとは想像もつかぬ程の盛宴。御想像ありたい。窓外に美しい夕燒雲を見つゝ適度の酒精にインスパイアされて、話術の巧み諧謔の妙ひきもきらず、誠に和氣あいあいの中に七時前貸り豊かな大會の幕を閉じた。

最後に、哲學の學會としては殆ど不可避の制約ではあるが、研究發表の殆ど全部が時間の制限で結論にまで至らず中途で切れるのは何としても惜しい、質問者も要領を握みにくい憾みがある、學問の性質にもよるが、何とか學會の形式なり「やり方」なりに改善考慮の餘地はないものか、という反省的意見も聞かれたことを附言しておく。(濠口)

發表要旨は三田、近藤氏を除き、發表者に出して戴いたレジメを基礎とした。三田氏の發表について要旨をのせえなかつたのは、レジメをいたゞけなかつたこと、筆者が直接發表を聴きえなかつたことによる。御宿想を乞ふ。

關西倫理學會

昨年十月發足して恰度一周年に當る十月二十三日の兩日、京都大學に於て本年度の總會並に學會を開催、遠く東北、四國からも會員の參加あり盛會裡に終始し得た。

十二日の午前中總會。同日午後及翌十三日の午前午後研究發表、十三日午後研究發表終了後懇親會。研究發表は質疑應答の時間を舍めて一人約一時間にて眞摯な發表と熱心なる質疑應答が終始なごやかな氣分の内に行はれた。

抑も本學會は昨二十五年十月、倫理學の研究及び發達をはかると共に廣く教育者との協働により道德教育の原理の確立に力めるといふ事を目的として發足した。爾來今期の學會開催迄研究會、公開講演會等を開催、現在中部、近畿、四國、中國等關西一圓よりの會員多數を擁してゐる。明年一月十八日京都學藝大學に於て「道德教育に關する諸問題」を共通テーマとして研究會を、翌十九日には道德教育研究協議會を開催の豫定。

さて左に今期學會の研究發表の概要を記しておく。

一、諭吉と鑑三

岐阜大學教授 室田 泰 一氏

兩者共に封建的思想を斥ける革新的思想家であつたが、兩者の立場の相違、無信仰とキリスト敎の信仰との相違からして、人間觀、國家觀、歴史觀平和に對する考等々に相違があ

り、諭吉は鑑三程平和主義を徹底させる事が出来なかつた。
 一、自律の構造 近畿大學助教 中村 正華氏

自律的精神の觀點から近代倫理を考察。先づカント哲學を手がかりとして考察を進め、近代倫理をその根本特徴において解明せんとするものである。然し吾々は自律を更に *autonomy* の精神に立歸り社會的展望の下に考察すべきである。

一、青少年の不良行爲と家庭の問題

大阪市立大學講師 柴田 善守氏

自律のはじまる青少年期といふ人生の大きな轉換期に於ける家庭の役割は極めて重大であるが、両親と子供の關係を子供を不瓦化するやうな類型を考察、その類型を種々説明。

一、個人倫理と社會倫理 —— その歴史的意義 ——

京都學藝大學講師 村上 敏治氏

哲學的倫理學の立場では「個人倫理」と「社會倫理」との關係は思辨的に統一されるのが常であるが、近代市民社會成立以後兩者は歴史的に深い分裂を示し、倫理學は常にこの問題との對決に迫られてゐる。これ等の問題につき東洋倫理を中心に史的に考察。

一、幸福の形而上學試論

滋賀大學助教 松原 定信氏

幸福をその最内奥で統べ治めてゐる核心は何であるかを究明せんとする。その立つ種々の基盤から多彩な幸福論が展開されたのであるが「ニコマコス倫理學」を焦點として、主としてギリシヤ・ローマ時代に視野を劃して考察。

一、尊皇論の歴史的意義

京都大學助教 坂田 吉雄氏

外歴の加重をきつかけに、從來絕對に批判が許されなかつた幕府政治が水戸學によつて批判されることになり、幕府の絕對權威を相對的なものに引下げる道がひらかれた。尊皇論には攘夷を主目的とするもの、幕權の補強を主目的とするもの、幕權の相對化を主目的とするものがあつたが、第三のものが幕權の否定に進んで明治維新がなしとげられた。(肥後)

哲學茶話會

十月十三日(土)午後二時
人文科學研究所會談室

NATURA DOCTE

森 進 一

要旨 テカルトの「懷疑」を、*natura doct* に對する「注意」という面から見ようとした。

先づ、「自然の光」との差別に觸れながら考える。兩者が、同じ様に「自然的」と見られるのは、共に、意志の選擇以前に働く「直證性」を持つことを意味する。然し *natura doct* は(一)心身合一面に働らき、(二)眞・僞何れに對しても必然性を持たぬのに對し、「自然の光」は、(一)純粹な精神内に働き、(二)必ず眞理に導く點に於いて大いに異なる。「懷疑」とは、自由意志がこの二種の自然的働きを前にして、何れを選ぶべきかを、先づ注意しつゝ、次に、内なる光に、自發的同意を以て従い、その光の照らす明晰判明の範圍内に判斷を限る「方法」を意味すると思はれる。

此の「方法」は、自然の創造主である神の「善意」が疑われている時、それに「欺かれぬ様」に用いられることは當然のことであるが、更に神の「善意」が確認された場合にあつても、

前 號 目 次

自立心交の教育……………	下程 勇吉
— 吉田松陰の教育 —	
個性性の問題……………	金子 榮一
— ナートルの研究 —	
危機神學の生成とその展開(承前)	樋元 和一
— 近世前期フランス精神史論 —	

又意味を失わぬ。何故なら、神の「善意」は、判断誤謬に對する人間の注意責任を無用にするのではなく、寧ろ、誤謬の責任は常に人間にあり、「善意」を見出すのは、自由意志の使用如何によるからである。その限り *natura deest* に對する「懷疑」は、尙意味をもつ。然し *natura deest* は、日常生活に於いて、身體保全に有益な積極的效用を持つてゐる。だが、「情念處理」を説くデカルトは、此處に於いても矢張り *natura deest* を警戒することを忘れない。——「自然的なるもの」に對する不自然な程の注意、之が、眞善に出来るだけ近づく爲の、デカルトの「方法的懷疑」である。

心理學讀書會

五月廿五日

「精神作業に於ける Blocking Phenomenon に就いて」

六月一日

野村 昭

「人格に於ける硬さについて」

岡本夏木

六月八日

「幼児の空間知覺の發達について」

生澤雅夫

「繪畫とパーソナリティ」

廣田 實

次 號 號 告

(十二月廿日發行豫定)

轉換の論理……………	長 尼 雅 人
實存哲學、ニーチェの哲學、	
西田哲學(完)	武 市 健 人
— 歴史的唯物論の意味の探求のために —	
危機神學の生成と	
その展開(完)	樋元 和一
— 近世前期フランス精神史論 —	